

特集1 中東から変わる世界

「特集にあたって」

地域をつなぎ 世界のいまを捉える

山本博之

本特集は、「アラブの春」と呼ばれるアラブ・中東地域の政変・民主化を対象としているが、二〇一〇年末から現在までに刊行された多くの類書と大きく異なる点がある。それは、「アラブの春」をアラブ・中東地域の問題として理解しようとするのではなく、世界の問題として理解しようとする点である。

シンポジウム

「中東から変わる世界」

本特集の第一部と第二部の論考は、二〇一一年四

月一六日～一七日に京都大学稲盛財団記念館で地域研究コンソーシアム（JICAS）と京都大学地域研究統合情報センターの主催によって行われた「地域の知」シンポジウム「中東から変わる世界」の各報告者が、シンポジウムでの議論を踏まえて執筆したものである。本特集の特徴と密接に関連しているため、まずこのシンポジウムについて簡単に紹介したい。

このシンポジウムは、二〇一〇年一二月の暴動で始まったチュニジアの「ジャスミン革命」がアラブ世界に波及して各国で反政府デモや抗議運動が起これ、二〇一一年二月にエジプトでムバラク政権が崩壊した頃に企画され、米英仏を中心とする多国籍

軍がリビアへの空爆に踏み切った約一ヵ月後に開催された。その後、リビアで八月に反体制派が首都を制圧し、カッターフィー政権の崩壊が宣言されたことに見られるように、四月のシンポジウム開催時にも事態は流動的だった。そのような状況で、このシンポジウムは、後に「アラブの春」と呼ばれることになる中東政変・民主化の世界史的な意味を検討するために行われた。

このシンポジウムは、JCAASが地域研究に携わる九〇以上の機関が加盟するネットワークとしての活動の実体を伴ってきたことを示すものとなった。すなわち、進行中の世界の出来事に対し、JCAASのネットワークを通じて地域研究者が所属機関や対象地域の壁を越えて集まり、また、外交などの実務者とも連携し、その出来事の世界全体における意味を検討する体制が整ったということである。第一セッションでは、所属機関や参加学会の枠を越えて第一線の地域研究者が集まり、「アラブの春」を中東やアラブ世界だけの問題と捉えるのではなく、今日の世界全体にとってどのような意味を持つのかを議論した。また、第二セッションでは、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「ヒューマン・パワー時代」の外交・安全保障の現場と地域研究」(代

表・川端隆史)との共催により、外務省から二名の職員をパネリストに迎え、「軍と政変」「宗教と社会福祉」「越境する人と情報」の三つのテーマによって、中東と他地域とを比較しながら「アラブの春」のメカニズムを検討した。

セッションごとの討論では、各パネリストがそれぞれの専門地域の事例を持ち寄って他地域の研究者と対話しながら事態を読み解く様子が見られた。一般に、地域研究者はそれぞれが研究対象とする特定地域のみで通用する概念や言葉遣いを多用するために地域を超えた議論が難しく、地域を超えた議論を行うには政治学や経済学などの概念を学ぶべきと言われることがある。これに対し、このシンポジウムは、地域研究者どうしが他のディシプリンの概念に頼ることなく意味のある議論を重ね、そこから結論が導き出されることを明らかにするものとなった。

なお、本特集はこのシンポジウムの議論をもとに各報告者が改めて執筆した論考を掲載したものであり、シンポジウムの内容をそのまま記録したものではない。このシンポジウムでの報告内容および議論の様子については、シンポジウムの報告書『中東から変わる世界』(JCAASコラボレーション・シリーズ第三号、地域研究コンソーシアム・京都大学地域

研究統合情報センター、二〇一一年九月）をご覧ください。

「地域の知」 シンポジウム

JCASが過去に行った緊急研究会には、二〇〇四年二月のインド洋津波の発生に際して二〇〇五年四月に行ったシンポジウム「緊急支援から地域再興へ——インド洋地震・津波災害と地域社会」などがある。進行中の世界の出来事に対応して行われる緊急研究会を、JCASでは「地域の知」シンポジウムと呼んでいる。

「いま、ここ」で展開している事態に対して、学術研究は何をいうことができるのか。いままさに目の前で展開している事態については、多くの場合、断片的な情報しか手に入らない。そのような状態では、安易に何らかの判断を下さないというのが学術研究のとるべき立場だろう。一時の感情に流されず、目の前で生じている出来事から時代や地域の違いを超えても成り立つ部分と「今回限り」の部分とを慎重に切り分け、それをもとに長期的な対策を考えるのが多くの学術研究の立場であるはずだ。

その一方で、厳密なデータをもとに時間をかけて慎重に原理を導き出しても、それだけでは目の前で展開している事態には直接の役に立たないという考え方もある。別の言い方をすれば、断片的な情報しか得られなくても可能な範囲で何らかの判断を下せるのが学術研究の専門性であり責任であるという考え方である。もしこれを軽い気持ちで行うならば、先人たちが厳密な方法で積み重ねてきた学術研究への信頼を失いかねない。しかし、いままさに目の前で起こっていることに対して「データが足りないのでも何もない」というだけでは、学術研究もまた社会の構成要素であることへの自覚に欠けるといわざるをえない。

地域研究は、限られたデータをもとに、限られた時間のうちに、目の前で起こっている事態に対して何らかの判断をすることを引き受ける学術的な態度であるといえる。それを当てずっぽうや勘頼みにしないため、地域研究者は、語学はもちろんのこと、歴史・地理や哲学などを含む基礎研究を日頃から十分にを行い、また、フィールド調査や共同研究などを通じて自らが馴染み親しんでいるのではない地域社会のかたちの捉え方を磨き、限られたデータをもとに限られた時間のうちに判断しても大きく間違わな

いような訓練を積んでいる。

また、地域研究は、前述したように、一般に、それぞれが研究対象とする特定地域のみで通用する概念や言葉遣いを多用するために地域を超えた議論が難しいという印象があり、それゆえに、研究内容が地域や専門性の違いを超えて理解されるようにすることが意識されている。このように、地域研究の成果が対象地域や専門分野の違いを超えて理解される「伝わる知」となることが必要である。J C A Sが行っている「地域の知」シンポジウムは、J C A Sのネットワークを利用して個別の地域研究者が持つ地域研究の成果を「伝わる知」である「地域の知」とするための活動の一つとして行われている。

紛争や災害などのいままさに目の前で起こっている事態に対して、限られたデータをもとに暫定的ながらも何らかの結論を出し続け、それを外交・報道・人道支援などの実務者と共同で検討し続けることには、目の前で起こっている事態に対する解決の道を探る意義とともに、想定外の事態に対応しようとする学術研究としての地域研究の方法を磨くという意義もある。J C A Sは、このようにして得られる「地域の知」を積み重ね、世界で何らかの出来事が起こったときにJ C A Sのネットワークを通じて

所属機関や専門地域の枠を越えて地域研究者が集まり、世界的な視野で事態の分析を行う体制を整えている。

本特集の構成

本特集は、二〇一一年四月に行われたシンポジウム「中東から変わる世界」の議論をもとに執筆された第一部と第二部、およびそれらの議論を踏まえて二〇一一年九月に実施された座談会から成る。

座談会では、イスラエル、パレスチナを中心とする中東地域研究の白杵陽氏（日本女子大学）、ハンガリーを中心にスラブ地域、旧ソ連・東欧地域を研究する家田修氏（北海道大学）、朝日新聞パリ支局長などとしてヨーロッパでの駐在経験が長い国末憲人氏（朝日新聞）、外交官として初代駐東ティモール大使を勤め、現在は大学で国際政治を教える旭英昭氏（東京大学）の四名が、西芳実氏（京都大学）の司会のもとで「アラブの春」の世界史的な意義および地域研究の可能性について検討した。

続く第一部は、酒井啓子氏（東京外国語大学）、恒川恵市氏（政策研究大学院大学）、武内進一氏（丁

ICA研究所)、藤原帰一氏(東京大学)、廣瀬陽子氏(慶應義塾大学)、高原明生氏(東京大学)が、それぞれ中東研究、ラテンアメリカ研究、アフリカ研究、東南アジア研究、旧ソ連・東欧地域研究、中国研究の立場から、「アラブの春」に関連して大きく分けて三つの問題関心を中心に論じている。一つめは中東の動きが世界の他の地域に及ぼす影響、二つめはチュニジアやエジプトにおける長期政権の崩壊を政変としてどのように理解するか、三つめは中東地域をどのように捉えるかである。

そして第二部では、増原綾子氏(亜細亜大学)、鈴木恵美氏(早稲田大学)、横田貴之氏(日本大学)、見市建氏(岩手県立大学)、錦田愛子氏(東京外国語大学)、高岡豊氏(中東調査会)が、アラブ・中東地域と他地域(主に東南アジア)との比較の観点から、「軍と政変」「宗教と社会福祉」「越境する人と情報」の三つのテーマに即して「アラブの春」のメカニズムを分析している。

中東研究者を含め、多くの研究者は「アラブの春」がわかりにくいと口を揃える。現在進行中の事態であるために情報が限られているという事情もあるだろうが、むしろわかりにくいことにこそ「アラブの春」の特徴があるのではないだろうか。そし

て、「アラブの春」のようなわかりにくい事態を起こしている今日の世界の状況を反映していると考えられるのではないだろうか。

「アラブの春」は、研究者から見ると政変としての形は見えにくい、その一方で、世間一般の人々にとっては、そこで動く人々の顔が見えるようになったという印象を与えたのではないだろうか。世間一般の人々にとって、中東アラブ世界の人々はイスラム教徒であり、すっぱり体を覆う長い衣装をまとい、生活習慣や考え方も自分たちと大きく異なるというイメージがあったのではないだろうか。イスラム教への強い信仰心があるとか、欧米諸国による植民地支配の経験があるとか、米国主導の国際政治に翻弄されているとか、社会の富裕層はオイル・マネーで富裕な生活を送っているといった説明が繰り返され、それらはいずれも自分たちの社会と大きくかけ離れたものとして受け止められていた。だからこそ、中東アラブ世界の政治情勢に関する報道に接すると、ここで挙げたような理由を思い浮かべ、納得してきたのではないだろうか。

しかし、「アラブの春」では事情が違っていた。群衆を率いる際立った指導者や組織がなく、イスラム国家建設や反米・反イスラエルといった先鋭的な

スローガンが出てこないの不思議だと言われた。それではどんな人々がデモに参加したのかと思えば、インターネットを利用して自分たちと同じような人たちであることがわかってきた。広場に集まった人々の様子は、おそらく日本で暮らす多くの人々にとっても等身大の人々として感じられたのではないだろうか。本特集の座談会で臼杵陽氏が述べているように、中東特殊論やイスラム特殊論が無効になってしまったのかもしれない。

このような事態をどのように捉えることができるのか。第一部と第二部では、それぞれ異なる観点から「アラブの春」の「わかりにくさ」にアプローチしている。

第一部の論考は、「アラブの春」を世界史に位置づけて理解しようとする試みである。ラテンアメリカや東南アジアのように世界をいくつかの地域に分けたとき、それぞれの地域における政変・民主化の経験の世界史の文脈において検討し、それを持ち寄ることを通じて「アラブの春」の世界史的な意義をはかるうとしている。

酒井氏は、中東諸国における政変・民主化の動きを整理し、共通する特徴として「イスラム」「左翼」「世俗」といったイデオロギー分類で運動を一

括して理解できないことを挙げている。また、恒川氏は、理論と統計を用いることで過去および他地域の事例と照らし合わせ、「アラブの春」の謎がどこにあるかを示した。

武内氏は、冷戦後の国際社会の構造変容の中で一九九〇年代にアフリカ諸国の民主化が進んだことを紹介した上で、「アラブの春」がアフリカに波及するかという問いに対し、その可能性は低いと答えるとともに、「アラブの春」もまた冷戦後の国際社会の構造変容の中に位置づけられるのではないかと示唆している。

藤原氏は、フィリピンと韓国ではほとんど同じ時期に民主化が起こった例を挙げ、それぞれの国・地域において政治・経済がある一定の段階に達すると民主化が起こるという捉え方だけでは民主化は理解できず、社会経済指標を見るだけでは民主化の原因がわかるとは限らないことを示し、ある地域で生じていることを理解する上で同時代に他の地域で起こっていることに関心を広げることの意義を指摘した。

旧ソ連諸国において体制側と反体制側がそれぞれ「アラブの春」を参照している様子を紹介した廣瀬氏も、民主化を経験しても民主的な体制が維持できるとは限らず、民主化そのものが問題の解決を意味

するとは限らないことを指摘した。

高原氏は、「アラブの春」が中国に波及するか、それとも中国政府は国内の民主化勢力を押さえつけることができるかという中国に向けられた関心に対し、中国で生じているのは「アラブの春」という話題を通じて当局と人々が互いに相手の様子を探り合いながら「対話」している様子を紹介しており、ここには体制と反体制を分けて捉えるのでない考え方が見られる。

第一部で見られるのは、それぞれの国や地域における政変・民主化の様子や他国の政変・民主化への対応は異なっている、地域を越えて互いの様子を参照しあっている国際社会の姿である。

第二部の論考は、いずれも、対立点を強調するのではなく、調整・仲介・対話の動きに関心を向けている。

政変後、旧支配勢力を排除して改革勢力だけで新体制をつくるのか、それとも旧支配勢力を取り込む形で新体制をつくるのかに関心を寄せること。軍が仲介者の役割をどこまで担いうるのかに注目すること。大きなスローガンを掲げるものの具体的なイシューに踏み込まないことで多くの人々を動員する試みに注目すること。政治の表舞台からは後退した

ように見えても、社会サービスを提供することで人々の支持を得たことを積極的に評価すること。当局に自分たちの意向を伝えるため、開かれた場であえて論争を呼ぶ行動をとる試みに目を向けること。

これらの議論に共通して見られるのは、問題があることを共有しつつも自分たちがいる場が極端な形で破たんしないようにする動きであり、また、個人的・日常的な問題の具体的な解決を重視し、柔軟な政治的立場をとる現実的な対応である。政治的態度や対立軸が見えにくくなっているということは、今日の中東・アラブ世界では人々が個人的・日常的な課題に対応しようとしており、また、そのような対応が可能になっているということの現れかもしれない。

第二部の論考に見られるような関心の向け方は、人類史的な課題の解決を棚上げにしているとの印象を与えるかもしれない。イスラム国家の是非や対米・対イスラエルの問題に手をつけずに日々の暮らしを営もうとしていると見えるかもしれない。また、社会正義や公正の実現という課題に取り組む方法としては迂遠に見えるかもしれない。しかし、個別の現場で行われている対話や実践に研究者が目を向けるのは、大きな物語を描き、人類史上の課題の

解決を願って声をあげ、広範な連帯をいざなうことが、目前の課題の解決になかなか結び付かなかったという現状があったためかもしれないことを考える必要があるだろう。ここでは、貧しい民衆が宗教勢力に結集して政権を打倒するという古典的な革命像や、イスラムや対米から中東を理解しようとする姿勢が問い直されているといえるだろう。

これまで、欧米主導の国際政治への「抵抗」や「中東はほかの地域と異なる特殊な地域である」との思いのために中東・アラブ世界が国際政治によって翻弄される側面が強調されてきたとすれば、「アラブの春」は、中東・アラブ世界に向けられた世界のそのような関心を溶かし、この地域に生きる人々の強さや柔軟さに目を向けさせるきっかけとなったといえるかもしれない。

座談会で示されたのは、「アラブの春」とは、米国が中東地域への関与を低下させ、それに伴って中東諸国が「普通の国々」になる過程であり、それは同時に米国が「普通の国」に向かう過程でもあるとする見方である。約二〇年前の東欧革命において、ソ連による東欧地域への関与が低下し、その結果としてソ連（ロシア）と東欧地域が「普通の国々」になっていったことと併せて考えるならば、現在は世

界中が「普通の国々」になりつつあると見ることも可能である。このような状況では、これまで世界の各地域の分析に用いられてきた既存の枠組が有効性を失い、改めてそれぞれの国や地域の事情に応じた地域理解が必要とされる。その意味で、本特集およびそのもととなったシンポジウムと座談会は、「アラブの春」にあわせて行われただけでなく、世界のあり方の変わり目に行われたものでもあり、その後の世界を理解する上での地域研究の重要性を明らかにするとともに、地域研究のネットワークとしてのJCA Sの役割と意義を示すものとなったといえるだろう。

（やまもと・ひろゆき／京都大学地域研究統合情報センター）